

## 2016年度日本数学会出版賞受賞者のことば

秋山 仁 氏

このたびは、2016年度日本数学会出版賞をお贈りいただき、身に余る光栄です。また、春の数学会で多くの方々に温かい言葉をかけていただき感謝感激でした。

私の数学人生の大きな岐路のひとつは“離散数学との出会いと米国への留学”です。そのキッカケになったのは、一冊の本、フランク・ハラリー先生による著書「**Graph Theory**」との出会いでした。この本がとりもつ縁で、私はハラリー先生の下へ留学しました。ハラリー先生は研究だけでなく教育や啓発にも情熱を注がれておられました。数学の奥深さや面白さを多くの人々に上手く伝えるためには、相当の工夫と準備をしなければならないことを先生から教えられました。実際、ミシシッピーでアメリカ数学会が開かれたとき、ハラリー先生は事前のチェックに幾度となく付き合ってくださいった上で、「大きい声で、ゆっくり話せば君の **Janglish** でも十分通じるよ。自信をもって、みんなに分かるように丁寧に君の結果を話さない」とアドバイスをいただきました。

「数式や概念を積み重ねて得た抽象的な結果を、単純で非専門的な言葉に言い換えて説明できないのなら、本当の意味でそれについて理解できてはいないと思わないさい」とラザフォードは学生に言っていたそうですが、同じようなことをハラリー先生も常々口にされていました。講演を行うときや本や論文を書くときに、私はいつもそのハラリー先生の教えを心掛けてきたつもりですが、実際そうになっていたか否かは分かりません。

本を書くことによって自分自身が面白いと思うことや不思議だと思うことを人々に伝えることは私にとってとても楽しいことで、それだけで十分大きな喜びでしたので、今回、ご褒美までいただきまして恐縮しております。浅学非才の身ではありますが、数学、そして数学を愛する人々に少しでも貢献できるようこれからも努めていくことで、今まで多くの方々からいただいた御厚意に、少しでも報いていきたいと思っております。ありがとうございました。

秋山 仁  
東京理科大学教授

内村 直之 著 「古都がはぐくむ現代数学—京大数理解析研につどう人びと」  
(日本評論社)

2016 年度日本数学会出版賞を受けて

私の『古都がはぐくむ現代数学—京大数理解析研につどう人びと』(日本評論社)に日本数学会出版賞を授けていただいたことは、大変な荣誉で嬉しいことでした。この本を作るのに、数学者の方々、その周りの研究者の方々、そして数学編集者の方々など沢山の人にお付き合いいただきました。誌面をお借りして御礼を申し上げます。

大学・大学院で物理を専攻したのち、新聞記者となり、主に科学関係の記事を書いてきました。その仕事の中では、数学の業績を紹介するのは大きなテーマでした。それは、数学そのものが、数学者その人が、興味深い存在だからでした。たとえば、「秋の夜の数学」というシリーズでは、数理科学の最前線を紹介するとともに、受験雑誌「大学への数学」誌上で高校生が学び育つエピソードを「昔読者、今学者」と題して書きました。夕刊1面で連載した「ニッポン人脈記 数学するヒトビト」も思い出に残る記事でした。

新聞記者を「卒業」、フリーランスとなって、当時、京都大学数理解析研究所所長だった森重文先生とお会いする機会がありました。取材のあと、森先生が「ちょっと後で来てくれませんか？」と声をかけてくださいました。なんだろう？と行ってみると「来年、この研究所は 50 周年です。いろいろおもしろい歴史があるけれど、普通の人にはなかなかわかってもらえない……」というお話でした。これをきっかけとして、本のアイデアが生まれました。

研究所を支えたたくさんの方々にお話を聞かせて頂きました。関連する史料もあちらこちらで見つけることもできました。できる限りの情報を集めました。数学的に正しい理解ができていたかどうか……先生方に背中を押してもらい、ご覧のとおりの本ができました。数学にあまりなじみのない人にも「数学者が何をやっているか、少しわかった」といってもらえたのは嬉しいことでした。

今も、数学会の企画である JIR(ジャーナリスト・イン・レジデンス)の活動に参加、数学者のインタビューを仲間と続け、「現代数学」誌に発表し続けています(この雑誌も一緒に活動している亀井哲治郎さんもこの賞を受賞しているのもうれしいことです)。これからも数学と数学者を書き続けていきます。よろしくお願いします。

内村 直之

## 高橋 礼司 氏

この度は日本数学会出版賞をいただき、誠に有難うございました。私は太平洋戦争最後の年 1945 年 4 月に旧制静岡高校に入学し、そこではじめて英語以外の外国語フランス語、ドイツ語に出会い、またいわゆる現代数学への入門も体験したのです。東大に入学して彌永先生、岩澤先生の教えを受け、1953 年秋からフランス政府の給費をうけてナンシー大学に留学しました。私の父は私が家業をつがず、数学という学問に専念することを積極的に支持してくれたのです。60 年前のことを今振り返ってみれば、誠に向こう見ずの我がまを押し通したもので、その後の私の人生航路も全く予期せぬ出来事の連続でありました。勿論これは当然自分一人の身から出たサビではありますが、その後の約 25 年にわたるフランスでの年月には数学的にも、語学的にも大きく影響されたものと思われまふ。今回このような私の体験に支えられてしたいいくつかのフランス語の本の翻訳について評価を得たことは誠に心強いものであります。翻訳にかぎらず、数学の本を書くことはある意味で音楽家の演奏に似た面があるように思われまふ。理論の組み立て方、記述方法についての工夫といった面ではさまざまなやり方があり、説明の仕方にもいろいろな相違があらわれて当然です。

外国語で書かれた美しい記述、感銘深い文章に出会ったとき、それを日本語で表現して、その言葉を話せない人々にもわかるようにしたいと思うことがあります。英語の場合は辞書を手許において読むことは現在では普通でしょう。しかしフランス語、ドイツ語となれば話は一寸別です。また自国語で書かれていれば、必要に応じて急いで斜めに読むことが可能です。数学の本でもそのような読み方が必要になることは周知の事実です。それに若い人々に与える刺激という面もありまふ。私が学生の頃には、数学者には英、独、佛語そして専門によってはロシア語の知識すら必要とされていまふ。実際私がユニタリ表現の勉強をはじめた頃がそうでした。留学したナンシーの寒い長い冬の夜にロシア語の大論文と取り組んだなつかしい思い出もあまふ。だからというわけではあまふませんが、現代の若い人々も英語だけでなくフランス語なり、ドイツ語なり、第二、第三の外国語に興味を持つべきだと思いまふ。それはさておき、私はこのごろ宿題として自分自身に課しているのですが、ヘルマン・ワイルのドイツ語で書かれたいくつかの文章とか、アランの“プロポ”の中の数学がらみの美しい文章などを日本語に訳して若い人達に読んでもらいたいと思いまふのです。私の体力がいくらかでも回復したらぜひ実行して、私を推薦してくださった方々への感謝の一端とし、出版賞へのお礼としたいと願っていまふ。

高橋 礼司